

「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる  
論争の再検討

高 橋 雅 延

### **The Recovered Memory/False Memory Debate Reconsidered**

---

In recent years the sexual abuse of children has been considered as a social problem in the United States. Some psychiatrists and therapists suggest that such trauma experiences as the child sexual abuse are repressed for a long time and recovered later in some kind of therapy. On the other hand, most of memory researchers insist that these "recovered" memories are considered the false memories which never happened.

The purpose of this article is to reconsider the recovered memory/false memory debate. In the first section, the child sexual abuse in the U. S. and Japan is briefly reviewed. In the second section, such trauma experiences as child sexual abuse is discussed in terms of posttraumatic stress disorder (PTSD). In the third section, some previous clinical researches that reportedly prove the possibility of recovering child sexual abuse memories are critically reviewed. In the fourth section, the article focuses on several attempts at creating a useful experimental analogue to study the implantation of false autobiographical memories that never happened. Finally, the future direction on the false memory research is addressed.

**Key words:** false memory, recovered memory, repression, posttraumatic stress disorder, child sexual abuse

## 1. はじめに

### (1) 「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる論争

児童文学作家マット・ステナーは、美しい妻、2人の子ども、友人、お金、名声のすべてに恵まれ、長年の念願だった作品のアニメ化の話も内定して、幸福の絶頂にいた。ところが、ある夜、ひどい姿で帰宅した娘のカミラが自殺を図った。幸い一命はとりとめたが、重度の鬱状態に陥って部屋に閉じこもってしまう。

鬱状態の原因は失恋らしいとわかり、マットは相手の男を探しだして話をするが埒があかない。思いあぐねたマットと妻のリズは、セラピストのナオミに治療を依頼する。やがて少しずつ症状の改善が見えてほっとしたのもつかの間、ナオミは環境を変えたほうが治療の効果が上がると説明し、カミラをレッツァーというセラピストのクリニックに入院させた。そして、ある夜マットは、いきなり家を訪れた警察官に逮捕された。逮捕の理由は、13年前、当時8歳だったカミラに対する性的虐待だった……。

保釈はされたものの、逮捕された夜を境に当然ながらマットの生活は一変する。出版社は作品の出版を見合わせ、アニメ化の話も立ち消えになった。親しかった友人たちも去っていき、あろうことか妻のリズまで家を出ていく。

セラピストのレッツァーはこう主張する。「あまりに辛いので、無意識のうちにカミラはその記憶を意識の底に閉じこめて忘れてしまっていた。それをセラピーの最中に思いだしたのだ」と。しかし、まるで身に覚えのないマットは、リズの信頼を回復するためにも裁判で徹底的に争い潔白を証明しようとする。ところが、証拠物件として当時

のカミラの日記が提出され、しかも信頼していたナオミが、犯罪者の側も自分の犯した罪を意識の底に押しこめて完全に忘れてしまうことがあるという驚くべき証言をする。

カミラの取り戻した記憶は本当なのか、マットはほんとうに罪を犯し、そしてその記憶をなくして自分を潔白だと思いこんでいるのか。

ここに引用した文章は、Jack Nevin (1997) による小説『記憶の間の底から (Past recall)』の日本語訳のあとがきに書かれている小説のあらすじである。この話はフィクションであるが、実は、この小説の筋書きとまったく同じようなことが、現在、欧米、とりわけアメリカにおいて、大きな社会問題となっている。

すなわち、親、近親者、まわりの大人から受けた子ども時代の性的虐待 (child sexual abuse) の抑圧された記憶 (repressed memory) を心理療法 (psychotherapy) などによって取り戻した者が、この回復された記憶 (recovered memory) をもとに加害者を訴えることが激増しているのである (Loftus, 1997a; Loftus & Ketcham, 1994)。たとえば、ブラウン大学の倫理学の教授 Ross Cheit のケースでは、1992年、38歳の時に、25年前の性的虐待の記憶を心理療法によって取り戻している。彼は、10歳から13歳まで、サンフランシスコ少年合唱隊に入っていた。そして、その合唱隊の夏合宿で指導者の William Farmer から性的虐待を受けていたというのである。このケースの場合、加害者もその性的虐待の事実を認めている (Horn, 1993)。古く、Freud (1915) は、非常に苦痛な体験の記憶は、抑圧 (repression) を受けて、意識的には思い出せなくなると主張していた。このような抑圧という考え方が、1990年代になって、心理療法家 (Herman, 1992) の間や、通俗書 (Bass & Davis, 1994; Terr, 1994) の中に、再び、見受けられるようになってきたのである。

しかし、このように回復された記憶が、まったくの間違い、すなわち偽りの記憶 (false memory) であったというケースも他方では多く認められて

いる。たとえば、1993年、カトリックの聖職者である Joseph Bernardin 枢機卿は、Steven J. Cook という青年から性的虐待で訴えられた。Cook は、未成年であった17年前に Bernardin 枢機卿から性的虐待を受けたという記憶を回復したというのである (Sheler, 1993)。後に、この回復された記憶が催眠療法 (hypnotherapy) によるものであり、その回復された記憶が間違いであったことが判明し、訴えは取り下げられている (Woodward, 1994)。この Bernardin 枢機卿のケース以外にも、回復された記憶が、心理療法によって植え付けられた偽りの記憶であったことが判明しているケースは、他にも数多くある (Shapiro, 1993)。

いずれにしろ、客観的な証拠がない場合には、法廷において、回復された記憶が真実であるのかどうか争われることが多い<sup>1)</sup>。そこで、回復された記憶によって訴えられた者 (主として、親たち) を救済するために、1992年に「偽りの記憶症候群協会 (False Memory Syndrome Foundation: 以下 FMS と略す)」が設立され活発な活動を行うようになってきている (1993年には、同様の趣旨で、イギリスで「偽りの記憶英国協会 (British False Memory Society: 以下 BFMS と略す)」が設立されている)。そして、この FMS の活動には、これまで Beck, A. T., Ellis, H. C., Hilgard, E., Kihlstrom, J., Loftus, E. F., Neisser, U., Roediger, H. L. をはじめとして、多くの心理学者がかかわっている (Pope & Brown, 1996, pp. 69-70.)。

はたして、子ども時代の性的虐待の記憶は抑圧され、そして、回復するのであろうか。この点に関する主張は、心理療法家と記憶心理学者との間で真っ向から対立している。

- 
- 1) 斎藤 (1998a) によると、日本でも児童期の性的虐待の被害者が成人になってから加害者を告訴する動きが、はじまっているという。斎藤 (1998a) 自身が弁護士とともに関わった 5 件の訴えにおける加害者は父親 (近親姦) 2 件、ボーイフレンド 1 件 (成人期の強姦)、中学教師 1 件、医師 1 件であり、被害者にはいずれも強い解離性障害 (dissociative disorder) がみられたという。そして、この 5 件のうち、4 件は加害者たちの謝罪により解決を見た。もう 1 件は、加害者 (父親) が弁護士に依頼して、日本で最初の偽りの記憶裁判に発展するかと思われたが、被害者が唐突に告訴を取り下げたという。

まず、心理療法家たちは、幼いころの性的虐待のようなトラウマ体験 (traumatic experience) は、それがあまりにも強烈なショックとなるために、一時的に抑圧され、想起できなくなると考えている。しかし、一方では、本人がそれらのトラウマ体験を思い出せなくとも、それが原因となって、抑うつ (depression) や摂食障害 (eating disorder) などのさまざまな精神的・身体的症状を引き起こすことがある。そして、このような抑圧された記憶を心理療法によって回復することで、それらの症状が治癒するというのである<sup>2)</sup>。

これに対して、記憶心理学者を中心に、そもそも回復された記憶は、真実の記憶ではなく、偽りの記憶を植え付けた結果であるという反論が数多く行われるようになってきた (Lindsay & Read, 1994; Loftus, 1993, 1997c; Loftus & Ketcham, 1994; 高橋, 1997)。一般に、抑圧された記憶を回復するために、かなり多くの者が、心理療法を受けている。たとえば、イギリスの BFMS 会員に対する調査では、回復された記憶によって親を訴えた子どもの中で、記憶の回復のために心理療法を受けていた者が47%にのぼっている (Gudjonsson, 1997)。心理療法は、基本的に、クライエントの語る記憶を共感的に受容する<sup>3)</sup>。そして、クライエントの心に思い浮かぶイメージ (image) の断片を重視し、それらをもとに一種の物語を作り上げていく

- 
- 2) 日本でも、次第に、近親相姦、性的虐待の経験を持つ患者の心理療法的事例が報告されはじめている (福井, 1992; 生地, 1992)。これらの心理療法家たちは、欧米の心理療法家と同様の立場に立つ者が少なくない。たとえば、福井 (1992) は、近親相姦による防衛機制の代表的なものとして抑圧が起こることをあげ、「近親相姦体験そのものは、患者に忘れ去られているのが普通であり、慢性の不安・抑うつ状態などの症状 (後述する) が表面に出現していることがほとんどである」(p. 120) と述べている。そして、続けて、「近親相姦の秘密は、患者の側から話し出されるよりも、治療者から積極的に問いかけることによって発覚することの方が多いうである。患者には、近親相姦体験は抑圧を受け忘れ去られるのが普通であり、慢性の不安・抑うつ状態、性的機能障害、薬物依存、慢性の自殺傾向、イライラをともなう注意集中困難、心気症、恐怖症、といった症状を訴えて治療にやってくる。さらに、強い罪悪感、低い自尊心、傷つきやすさ、無力感等を抱いており、結婚生活や子育てに困難をおぼえている患者も多い」(p. 124) と述べている。

(森岡, 1994)。また、時には、催眠 (hypnosis) が使われることもある。このような技法は、記憶を回復するのではなく、もともと存在しなかった偽りの記憶を生み出してしまう危険性の方が、きわめて大きいのである。

こうして、いわゆる「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる論争は、現在もなお、激しい論争が続いている。その一方で、回復された記憶の真実性があいまいなまま、それらの記憶がもとで、長年親しかった者同士が憎み合ったり、家族が崩壊するようなことが多数起こっているのである (Loftus, 1997a)。このような現状を考えるならば、一刻も早く、これらの論争に何らかの解決の糸口を見出す必要がある。

## (2) 本論文の目的と構成

幼児期にさまざまな虐待、とりわけ性的虐待を受けたサバイバーが実在することは間違いない<sup>4)</sup>。本論文は、これら性的虐待の存在そのものを否定したり、サバイバーの人々の苦しみを無視するものではない。本論文の目的は、「蘇った記憶と偽りの記憶をめぐる論議が、児童の性的虐待の問題を曖昧にしたり覆い隠すものであってはならない」(飛鳥井, 1998, p. 329) という立場に立った上で、「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる論争の現状の問題点を明らかにすることにある。

本論文は、次の5つの部分に分かれている。まず最初に、性的虐待の定義や現状について簡単に述べる。2番目に、性的虐待のようなトラウマ体験をストレス後心的外傷障害 (post-traumatic stress disorder: 以下 PTSD と略す) として位置づけた上で、トラウマ体験の記憶について考察を加える。

- 3) もっとも、心理療法家がクライアントの話す内容をセラピー中、最後まで真実として、考えているわけではない。たとえば、生地 (1992) は、クライアントの自発的に話す外傷体験の記憶を事実として聞く態度を重視しているが、それは、セラピーの初期の段階においてだけである。なぜなら、そういう態度を初期に取らないと、セラピーがうまく進まないからである。
- 4) サバイバーないしは生存者 (survivor) とは、犠牲者 (victim) と同義であるが、とりわけ、子どもの頃に性的虐待を受けて、深刻な精神的外傷を負いながら生きてきた人々をこのように呼ぶことが多い。

3 番目に、性的虐待の記憶が抑圧を受けたり、回復するということを示したとされる研究の問題点を明らかにする。そして4 番目に、記憶の回復を無理に行わせると偽りの記憶が作られてしまうことを実証した実験を紹介する。そして最後に、偽りの記憶に関する研究の今後の方向性について考察を加えることとする。

## 2. 性的虐待の定義と現状

### (1) 児童虐待と性的虐待の定義

近年、日本でも、児童虐待 (child abuse) が、大きな社会問題として取り上げられることが多くなってきた<sup>5)</sup>。児童虐待の定義に関しては、どの程度の行為までを虐待として含むかという点で必ずしも一致しているわけではない (池田, 1993)。しかし、おおむね、児童虐待とは、「親、または親に代わる保護者により、非偶発的に (単なる事故ではない、故意を含む)、児童に加えられた、身体的虐待、保護の怠慢ないし拒否、性的虐待、心理的虐待」 (池田, 1987) を指すと考えられている。

これらの虐待の中でも、児童に対する性的虐待とは、「成人が子ども (18 歳以下) に対し、性的暴行を加えること」 (池田, 1993, p. 257) とされる<sup>6)</sup>。これまで報告されてきたいくつかの性的虐待のケースの中には、報告者の訴えをそのまま信じるのならば、目を覆いたくなるようなおぞましいものが少なくない (服部, 1998; 山口, 1994)。しかし、この性的虐待の定義もま

---

5) 一般に、「abuse」は「虐待」と訳されるが、斎藤 (1998b) は、このように訳されてしまうことにより、問題が見えにくくなることを指摘している。すなわち、「abuse」の第1の意味として、「ののしる」をあげ、2番目が「誤用、乱用、悪用」、3番目が「ミストリートメント (mistreatment)」であることを引き合いに出しながら説明している。同様のことは、石川 (1997) も指摘している。

6) この場合、「両親のように血縁関係のあるときは近親姦インセスト」と呼ぶ。つまり、「従来使用されてきた近親相姦という語は相互の意志という意味があるので、最近では成人から一方的強制の場合は近親姦と呼ぶ」とされる (池田, 1993, p. 257)。



た、児童虐待の定義と同様に、どの程度の行為までを性的虐待に含めるのかという点で、一致しているわけではない。とりわけ、日本では、性的虐待を狭くとらえる傾向が強く、性的虐待の加害者を親や親に代わる保護者に限定し、性交以外の性的行為を性的虐待から除く傾向が認められる（北山，1994）。これに対して、アメリカでは、親または親に代わる保護者とはとより、これら以外の者が児童に行うすべての性的行為を性的虐待として含んでいる。ここで言う性的行為には、具体的に、次のような行為が含まれている。すなわち、「性器、乳房部、大腿部への身体接触」、「子どもの面前での加害者のマスターベーション」、「子どもを使った加害者のマスターベーション」、「口腔—性器性交」、「肛門—性器性交」、「性器—性器性交」、「性器への性器以外の挿入（異物、指など）」、「性器の露出、窺視（子どもの入浴など）、子どものヌード（絵画、撮影）など」が含まれるという（北山，1994，p.11）。

本論文では、以下、アメリカにならって、性的虐待の定義をかなり広くとらえることにする<sup>7)</sup>。

## （2）アメリカにおける性的虐待の現状

アメリカでは、すでに、1960年代より児童虐待の問題が表面化しており、

- 
- 7) 日本でも、子どもに対する性的虐待が次のように広くとらえられることもある（子ども性虐待防止市民ネットワーク・大阪，1997，p.13）。
- (1) 親または親にかかわる養育者によるものだけではなく、家庭、学校、地域、その他あらゆる場所で発生するものを含む。
  - (2) 性的・社会的に成熟した大人から、発達の途上にある子どもに対して行われる行為。この当事者の間には社会の構造によって力関係の不均衡が存在しており、または、発達途上にある子どもは、その行為の意味を正確に理解した上での合意を与えることができない。
  - (3) その力関係の不均衡・子どもの未成熟を利用して、大人が子どもに対し、自己の性的欲望を満足させるため、または自己の優位な立場を示すために行われる行為。
  - (4) 子どもの生にかかわる自由と尊厳を侵害すること。
  - (5) 具体的な行為としては性交・性交類似行為・身体接触・性器や裸および下着姿などを見ること・性器を見せること・ポルノなどを見せること・その他性的な意味を持つあらゆる行為をすること、またはしようとする事。

各種の対策（とりわけ、虐待の通報に関する法システムの整備など）が講じられるようになっていた（上野，1996）。そして，1980年代半ば以降は，児童虐待の通報の中でも，性的虐待の通報数が激増し，性的虐待が社会的に大きな問題としてとりあげられるようになってきた。

アメリカにおける性的虐待の実数については，実にさまざまな調査結果が存在している（石川，1992a）。これらの調査結果から得られた数値には大きなばらつきがあって，正確な実数をつかむことは難しい（Pope & Brown, 1996）。こうした数値のばらつきの原因としては，性的虐待の定義の違い，調査サンプル（調査対象地域の社会階層や民族構成）の違い，調査方法（面接法，郵送法など）の違いなどが考えられている（北山，1994）。

現在，これらの調査の中で，もっとも信頼のおける調査とされるのが，Russell（1986）によって行われたものである。この調査結果に関しては，石川（1992b, 1996）において詳細に報告されている。Russell（1986）は，サンフランシスコの女性930名を対象に，人口学的構成がアメリカ全体のものに合わせた確率標本調査を行っている。その結果，18歳未満で性的虐待を経験した女性の割合は38%であった。このうち，父による性的虐待は4.5%という値が得られている（ここは，石川，1992bによる）。

Russell（1986）の研究は，女性に限定されていたが，最近では，Elliott（1997）が800名の18歳以上の男女を無作為抽出し，郵送法で児童期の性的虐待を含む外傷体験について調べている。その結果，505名（男性225名，女性280名）の回答者のうち，児童期の性的虐待の体験者の男女を合わせた割合は，23%にもなっていた。

このように，アメリカでは，子どもに対する性的虐待の増大が，大きな社会問題となっているのである<sup>8)</sup>。

8) このような現状を受け，子どもに対する性的虐待に関連した研究も急増している。たとえば，1990年から1995年までに性的虐待に関連した研究について，PsycINFOのデータベースを検索すると，のべ3840件の研究があらわれる。その内訳は，学術論文が2402件，単行本ないしは単行本の1章が911件，学位論文が527件となっている（Kalichman & Gary, 1996）。

### (3) 日本における性的虐待の現状

これに対して、日本の性的虐待の現状については、石川（1998）の指摘のように、未だ確率標本調査は実施されておらず、無作為標本調査が行われはじめたところである。残念ながら、現在得られている資料の多くが、たとえば、医療機関や児童相談所などの公共事業機関の目に留まったケースについての調査にとどまっている（広岡、1998；池田、1993）。このように、現在のところ、日本における性的虐待の実状については、満足のいくような体系的な調査は行われているとはいえない。日本において、調査すら行われていない大きな理由の一つは、そもそも日本では性的虐待はほとんど存在しないという世間の過小評価にあると考えられる<sup>9)</sup>。

そのような中で、石川（1997）の行った西日本の大学、短大、専門学校の学生456名の調査結果によれば、父母から性的虐待を受けたと回答した者の割合は7.5%であった。この数値をもとに、石川（1997）は、「それを単純にわが国の19歳以下の人口3098.8万人（1992年）に当てはめると、232.4万人の子どもたちが両親によってインセスト的虐待を受けた、ないし受けつつあることになるから、むしろ驚異に値する数字と言わねばならない」（p.105）と述べている。

したがって、日本においても、世間の過小評価とは異なり、相当数の性的虐待が存在している可能性を否定することはできないと思われる。

9) 一般に、日本で性的虐待の存在が過小評価される原因として、次のような3点を考えることができる（池田、1991、1993）。すなわち、第1に、親や一般市民に性的虐待の存在を否定したいという潜在的な願望があること、第2に被害児に明確な臨床的身体所見が乏しく、症状があっても特定のものは認められないと同時に、子どもの発達段階によって、現れる症状が異なること、第3に、他の身体的虐待とは異なり、加害者からの暴力のないことが多く、親の権威、説得などとともに行われるために、子どもが被害感をもたずに過ぎてしまうことがあるためであるとされる。

### 3. PTSDにおける記憶障害

一般に、戦争、天災、衝撃的な事件、事故の目撃や体験は、外傷すなわちトラウマ体験となる。そして、このようなトラウマ体験は、精神的、身体的に大きな障害を引き起こす。これらのさまざまな障害は、PTSDと呼ばれている（久留，1996）。PTSDとは、外傷的な出来事にさらされたことがきっかけとなり、さまざまな心的障害が複合的に生じるものとして定義されている（American Psychiatric Association, 1994）。

PTSDの原因となる外傷的な出来事とは、次の2つがともに認められるものを指す（American Psychiatric Association, 1994）。すなわち、第1に、「実際にまたは危うく死ぬまたは重傷を負うような出来事を、1度または数度、または自分または他人の身体の保全に迫る危険を、患者が体験し、目撃し、または直面した」ということ、それとともに、第2に、「患者の反応は強い恐怖、無力感または戦慄に関するものである」ということの2つである。

このPTSDにおける心的障害の中には、一見矛盾するような記憶に関連した2種類の障害が認められる。一つは、外傷的な出来事のフラッシュバック（flashback）に代表される自動的な再体験である。もう一つは、これとは逆に、「外傷の重要な側面の想起不能」という健忘（amnesia）である。

このうちの第1のフラッシュバックの場合、出来事のまとまった場面ではなく、ごく一部分だけの映像が断片化して不随意的に想起されることが多い。たとえば、北海道南西沖地震（1993年）で娘を亡くした遺族の中には、娘の遺体が海からあがってきた時の顔の映像が、頻繁にフラッシュバックするという悩みを訴える者も認められる（藤森，1997）。同様に、地下鉄サリン事件（1995年）に遭遇した被害者の中にも、「突然にありありと事件を思い出す」というフラッシュバックを訴える人が、事件後2年たっても、40%近くの者に認められている（地下鉄サリン事件被害者の会，1998）。

これに対して、第2の記憶障害である出来事の健忘という障害に関しては、まだPTSDの概念の存在しない時代から、ヒステリー患者などの症状の一つとして、よく知られていた<sup>10)</sup>。最近では、たとえば、レイプを受けた被害者が、あまりにも強烈な精神的ショックのために、事件そのものの記憶を思い出せなくなってしまうということが報告されている(Christianson & Nilsson, 1989; Kaszniak, Nussbaum, Berren, & Santiago, 1988)。とりわけ、レイプが原因となるPTSDは、レイプトラウマ症候群(rape trauma syndrome)と呼ばれることもある(Burgess & Holmsrom, 1974)。一般に、レイプの犠牲者たちは、レイプを受けている間中、殺されるのではないかという異常なまでの恐怖状態に置かれる。このようなトラウマ体験を受けた者たちは、睡眠障害、吐き気、驚愕反応、悪夢を訴えたり、時には、健忘の一種である解離や無感覚を訴えることもある<sup>11)</sup>。

#### 4. 性的虐待の記憶の抑圧や回復に関する実証的研究の問題点

PTSDの記憶障害のうちの第2の健忘の症状こそが、性的虐待の記憶が抑圧されるかどうかということと密接に関連している。ここでは、性的虐待のサバイバーに認められる健忘や回復を実証したとされる代表的な研究を2つとりあげ、その問題点を明確にする。

---

10) ただし、このような健忘が引き起こされる理論的説明は、必ずしも一致していたわけではない。よく知られているように、神経症の中心概念として、Freudは抑圧を持ち出したのに対して、Janetは解離(dissociation)を中心に据えた。抑圧と解離は、現象面だけを見れば、大変類似している。つまり、外傷となった体験の記憶や思考が意識内容から切り離され、想起できない点では同じと言える(岡野, 1995)。ただし、岡野(1995)は、この2つの概念の違いを「抑圧が主体により積極的に用いられる機制であるのに対して、解離は主体が外傷体験に翻弄された結果、受け身的に陥る状態である」(p. 133)と述べている。

11) 実際、日本でも最近出版されたレイプの犠牲者の手記(緑河, 1998)を読むと、レイプがきわめて重篤なPTSDを生み出すことを実感できる。

### (1) Herman & Schatzow (1987) の研究と問題点

Herman & Schatzow (1987) は、性的虐待のサバイバーの女性53名(平均年齢31.7歳)を対象に12週間のグループ・セラピーを行った。そして、グループ・セラピーによって性的虐待の記憶がどの程度回復したかを調べてみた。すると、クライアントを、次の3つの群に分けることができたのである。すなわち、セラピーの開始前から性的虐待を詳細に覚えていた(抑圧のなかった)者20名、セラピーの最中にいくつかの新しい記憶を思い出した軽度の健忘者19名、セラピーの前には何も思い出せずに、セラピーによって記憶が回復した重度の健忘者14名であった。

このように、サバイバーの中に、性的虐待の記憶を完全に抑圧していた者が14名(28%)いたことが明らかになったのである。そして、これらの抑圧を示したとされる者のうちの60%が、セラピーによって記憶を回復したとされた。たとえば、最初、重度の健忘(抑圧)を示し、後に記憶を回復したケースには、次のようなものがあった。すなわち、37歳の主婦Dorisは、夫との性交中にパニック発作に襲われるために、性生活に困難を生じて治療に来ていた。グループ・セラピーの最初に、彼女は子ども時代の記憶を完全に失っていると報告した。そして、セラピーが進むうちに、6歳から12歳まで父親に性的虐待を受けていた記憶を完全に取り戻したというのである。

このケースに代表されるように、Herman & Schatzow (1987)の研究では、性的虐待の記憶を抑圧していた者の存在が明らかになっただけではなく、そのうちの60%の者が記憶を回復したというのである。

しかしながら、この研究には、大きく2つの問題点が指摘できる(Kihlstrom, 1996, pp. 300-301.; Pope & Hudson, 1995)。第1は、健忘を示した者の原因が抑圧であるとは必ずしも考えられないということである。一般に、ごく幼いころの出来事は思い出すことができない。この現象は、幼児期健忘(childhood amnesia)と呼ばれ、現在もなお、その原因について研究が進められている(Kail, 1990)。したがって、性的虐待を受けていた年齢

が幼い時期であるのなら、たとえ健忘が認められたとしても、それは単なる幼児期健忘にすぎず、抑圧で説明する必然性はなくなる。Herman & Schatzow (1987) の重度の健忘を示した者の虐待の平均開始年齢は、4.9歳 (標準偏差2.4) であった。これに対して、健忘を示さなかった者の場合、虐待の平均開始年齢は10.6歳 (標準偏差4.5)、軽度の健忘を示した者では8.2歳 (標準偏差2.8) であった。したがって、重度の健忘を示したクライアントが存在したという結果について、それを幼児期健忘によって説明することが可能である。

第2の問題点とは、本当に記憶が回復されたのかどうか調べることができないということである。言うまでもないことであるが、クライアントによって報告された (回復された) 記憶の客観的な証拠がなければ、正しい記憶が本当に回復されたかどうかはわからない。この点に関して、Herman & Schatzow (1987) は、性的虐待の記憶の客観的な証拠をクライアント自身に探させている。彼女たちによると、74%のクライアントがそのような証拠を見つけることができたという。つまり、21名 (41%) のクライアントは、加害者や家族の証言で確認し、残りの18名 (34%) のクライアントは、家族内のきょうだいが同じ加害者に虐待されていることを確認したという。しかし、これら客観的な証拠の確認できた者が、重度の健忘 (抑圧) を示した者のうちに何名いたかは、論文の中に記載されていない。たとえば、先ほどあげた重度の健忘者 Doris の場合には、客観的な性的虐待の証拠がまったく見つかっていないのである。

このように、Herman & Schatzow (1987) の研究は、一見、性的虐待の記憶が抑圧され、それがグループ・セラピーによって回復されたように思われるかもしれないが、実際には、数多くの問題点が指摘され、回復された記憶を支持する証拠とは言えないのである。

## (2) Williams (1994) の研究と問題点

Herman & Schatzow (1987) の研究をはじめとして、多くの研究 (Briere

& Conte, 1993) では、性的虐待を受けたと思われるクライアントに、過去の記憶を想起させている。しかしながら、これらの研究では、上に述べたように、性的虐待の事実の客観的な確認が難しいという致命的な欠点が指摘できる。実際、この欠点は、アメリカ心理学会の会員を対象に、性的虐待の記憶を調査した Feldman-Summers & Pope (1994) の研究にも当てはまる。この研究では、対象となった330名の男女の会員のうち、23.9%の者が性的虐待を受けていたと報告しているが、これらの者のうちの50%では、何ら客観的な確認が行われていないのである。

これに対して、Williams (1994) の研究は、このような欠点を克服した研究として有名なものである。彼女は、生後10ヵ月から12歳 (1973年4月から1975年6月) までに、性的虐待の治療を病院で受けた206名の者を調査対象として選んだ。そして、実際に性的虐待が起こった時点から、ほぼ17年経った1990年と1991年に、これらの性的虐待の経験者を探し出し、そのうちの129名 (18歳から31歳) を対象に、面接調査を行ったのである。その結果、面接時に、38%の者が17年前の性的虐待の記憶を思い出すことができなかった (抑圧が起こった) というのである。

しかし、この研究においても、4つの問題点を指摘することができる。すなわち、第1に、性的虐待の記憶を想起できなかった者のうち、虐待時の年齢が6歳以下の者の割合が大きかったことから、想起できなかった理由としては、単なる幼児期健忘のためであるという可能性がきわめて強い (Kihlstrom, 1996, p. 303; Pope & Hudson, 1995)。

第2に、ここで対象にされた性的虐待の内容を見ると、性交、性器接触 (touching)、撫でまわし (fondling) というように、程度の重いものから、比較的軽いものまで含まれている。したがって、Pope & Hudson (1995) の言うように、軽い虐待であったために、それを忘れてしまっただけの者もかなり含まれていると思われる (飛鳥井, 1998)。残念ながら、Williams (1994) の論文には、記憶を思い出せなかった者の性的虐待の程度についての記述はない。さらにまた、この点に関しては、幼いころの性的虐待の



場合、本人にとっては、その性的虐待行為の持つ重大さが理解できていないこともある。つまり、そのような行為が家庭内で日常的なものとして行われている場合、その行為の持つ意味が、子どもには理解できないことがある。そのため、大人である研究者が、その性的虐待行為の程度を重いものとして判断したとしても、実は、それは当の子どもにとっては、軽い行為として忘れられてしまったということも十分に起こり得るのである。

第3に、Williams (1994) 自身は否定しているものの、健忘を示した38%の者の中には、忘れていたのではなくて、意識的に抑制して話さなかった者がいたという可能性も否定できない (Briere, 1992; Loftus, Garry, & Feldman, 1994; Pope & Hudson, 1995)。とりわけ、Kihlstrom (1996) が指摘するように、子ども時代の性的虐待の記憶を初対面の面接者の前で話すようなことは、通常、きわめてまれなのではないかと思われる。

第4に、これは Herman & Schatzow (1987) の研究の問題でもあるが、ここで述べたすべての研究には、(性的虐待を経験していない) 統制群が設けられていない (Briere, 1992)。したがって、統制群がない限り、これらの研究結果から得られた知見の妥当性や一般性は、きわめて不確かなものと言えるのである。

## 5. 偽りの記憶の移植実験

先に見たように、性的虐待の記憶の抑圧や回復を実証したとされる研究には、数多くの問題点が存在している。ここでは、幼いころの性的虐待の記憶の回復を試みること自体に、実際に起こらなかった偽りの記憶が作り出されてしまう危険性のあることを示した研究に焦点を当てる。実は、このような研究は、すでに欧米において数多く行われている (Hyman & Billings, 1995; Hyman & Pentland, 1996; Hyman, Husband, & Billings, 1995; Loftus, 1993)。たとえば、Hyman & Pentland (1996) の実験では、幼児期の偽りの出来事を無理に回復させようとする面接を繰り返したり、面接中にその出

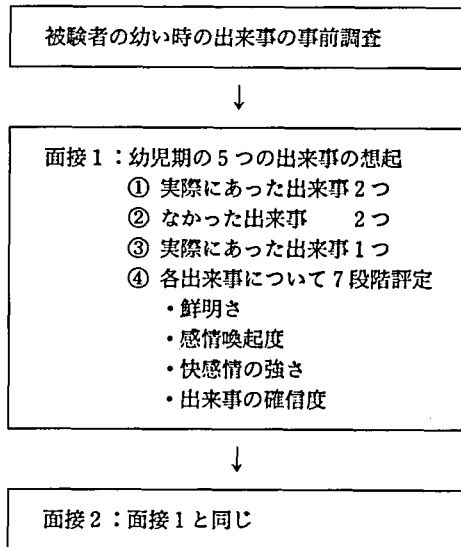


図1 実験の手続き (Hiransi, 1998)

来事のイメージを思い浮かべることによって、起こっていない偽りの記憶が作り出されてしまうことが見出されている。そこで、次に、日本人を対象に、Hyman & Pentland (1996) の部分的追試を行った Hiransi (1998) の研究を取り上げる。

Hiransi (1998) は、まず、60名の被験者(女子大学生)の親に対して、郵送法によって、その被験者が3歳から8歳までの間に実際に起こった出来事について調べた(図1参照)。この際、まず、10個の出来事(「病院に行った時」、「家族旅行」、「結婚式」、「ペットが亡くなった時」、「入学式」、「誕生日」、「きょうだいが生まれた時」、「学校の発表会」、「いたずらをした時」、「卒業式」)を指定して、そのうちから3つの出来事を自由に選ばせて、その3つの出来事についての記憶を記述させた<sup>12)</sup>。

この質問紙の回収率は50%であり、最終的には、27名の女子大学生が被験者となった。そして、被験者に「幼い頃の思い出をどれだけ正確に思い

出せるか」について調べる実験であると教示した後、まず、(親によって述べられた)実際に起こった出来事を2つ呈示して、それぞれについて詳しく想起させた。次に、実際には起こっていない出来事2つ(「6歳の時に、捨て猫を拾って帰って、母親に怒られたこと」、「5歳の時に、デパートで迷子になって呼び出しを受けたこと」)を呈示して、これらの出来事が実際に起こったことであると告げて、これらについての詳しい想起を求めた(これら2つの出来事が起こっていないことは、親に対する質問紙によって確認してあった)。そして、引き続いて、実際にあった出来事を1つ呈示して同じように思い出させた。最後に、それぞれの出来事一つ一つについて、想起時の鮮明さ、感情喚起度、快感情の強さ、「確かに起こった」という確信度を7段階で評定させた。そして、日をおいて、まったく同じ手続きを使った面接をもう一度繰り返した<sup>13)</sup>。

こうして、2回の面接中に呈示した出来事のうち、どれだけの出来事が想起できたかという割合を調べてみた<sup>14)</sup>。その結果、図2に示したように、本当にあった出来事については、おおむね、75～85%が思い出されていた。一方、実際には起こらなかった出来事については、それを想起した人数そのものが少なかったものの、おおむね5～15%が誤って想起されたことが

12) このようにしたのは、出来事がある程度指定しないと、親によって報告される出来事のばらつきが非常に大きくなってしまうことが予備実験から明らかになっていたためである。

13) 実際には、2回目の面接の後に、田辺・小川(1992)の解離性体験尺度(Dissociative Experience Scale)を行った。これは、当初、偽りの記憶を示す者とそうでない者との解離傾向の違いを調べることを意図したものであった。しかし、実際には、偽りの記憶を示した者がごく少数であったため、分析は行っていない。

14) 記憶が想起できたかどうかの採点基準は、Hyman & Pentland(1996)とまったく同じ次の3つの基準を採用した。すなわち、第1に、被験者がその出来事を覚えていると言った場合、第2に、実験者の尋ねた質問に含まれていない情報(その出来事が起こった場所やメンバーへの言及など)があった場合、第3に、実験者の尋ねた質問にない情報でありながら、それらが相互に関連していると判断できる情報があった場合、のいずれか一つが満たされていた場合に想起されたと判断した。

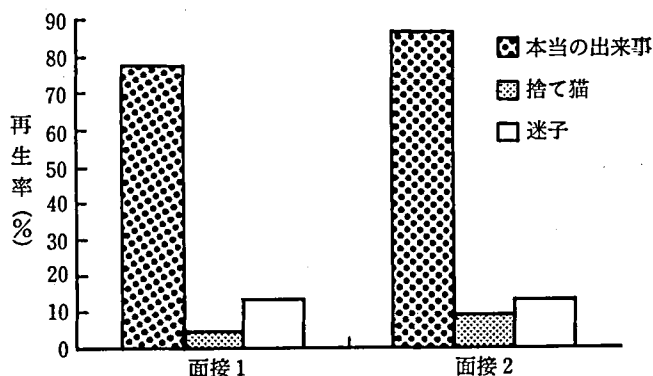


図2 本当の出来事と偽りの出来事の再生率 (Hiransi, 1998)

表1 実際に起こっていなかった「捨て猫を拾った」出来事に関する想起の例 (Hiransi, 1998)

## 1 回目の面接

面接者：「あなたが6歳の時のことですが、道で捨て猫を拾って家に連れて帰り、お母さんに叱られたことがありましたよね。」

被験者：「えっ、そんなことなかったはずですよ。」

面接者：「猫とよく遊んでいたことは覚えていますか？」

被験者：「そうですね、覚えていますけど……。でも、猫を家に連れて帰ったことはなかったと思うのですが。」

## 2 回目の面接

面接者：「捨て猫を家に連れて帰った時のことはどうですか？」

被験者：「ええ、よく覚えています。小さい頃、猫が大好きだったんです。近所にたくさん猫がいたので、たぶんその猫を連れて帰ったのです。」

面接者：「お母さんは家でペットを飼ってはいけなかったと言っていましたよね。」

被験者：「ええ、でも、その猫はとてもかわいかったので、連れて帰ってしまったのです。」

面接者：「お母さんに叱られたことを覚えていますか？」

被験者：「ええ、連れて帰ったとき、母は怒っていました。」

表2 実際には起こっていなかった「デパートで迷子になった」出来事に関する想起の例 (Hiransi, 1998)

## 1 回目の面接

面接者：「あなたが5歳の時のことですが、お母さんと一緒にデパートに行って迷子になり、アナウンスであなたの名前が呼び出されましたよね。」

被験者：「ええ、ちょっと待ってなさいと言われたのですが、待てなかったのです。それで、どこか迷子のための場所に連れて行かれました。」

面接者：「結局、お母さんに会えたのですか？」

被験者：「ええ。」

面接者：「迷子になった場所を覚えていますか？」

被験者：「婦人服の売場だったはずですよ。」

## 2 回目の面接

面接者：「デパートで迷子になった時のことはどうですか？」

被験者：「その時、両親は私に待ってなさいと言ったのですが、私が待っていませんでした。不安になってその場を離れてしまったのです。それで、どこかへ連れて行かれて、私の名前が呼び出されました。」

面接者：「その時のようすをもう少し話してください。」

被験者：「私が誰か女の人のスカートにしがみついたので、その人が私を迷子の呼び出しの所へ連れて行ってくれたのです。」

面接者：「その場所はどんなところでしたか？」

被験者：「子どもが遊べるような所で、時々、マクドナルドにあるような所でした。」

明らかとなった。なお、表1と表2には、実際には起こっていなかった出来事について想起した被験者の想起の例を示した<sup>15)</sup>。

また、図3は、実際にはなかった出来事なのに、誤って想起された出来事について、被験者が評定した結果を示したものである。おおむね、快感情の強さ以外は、面接の繰り返しによって、偽りの記憶にもかかわらず、鮮明さ、感情喚起度、確信度のいずれも強くなっていくことがわかる。

このように、その割合は10%前後と小さいとは言え、ごく普通の出来事であっても、偽りの記憶の移植されることが、実際に起こるのである。

15) もとの論文は英文であるが、ここは筆者が訳したものである。

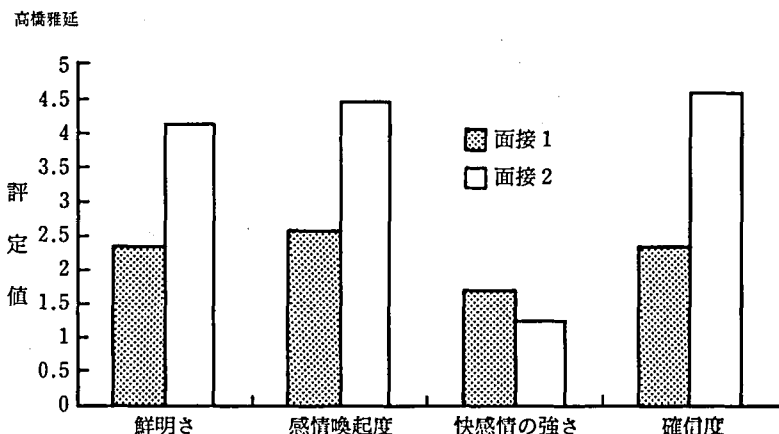


図3 想起された偽りの出来事の種類評定値 (Hiransi, 1998)

現在、このようなタイプの研究においては、偽りの記憶の生起に関連する変数（たとえば、イメージや反復回数など）や、個人差との関係（たとえば、被験者の暗示性、解離傾向など）が活発に研究されている。そして、これらの研究結果をもとに、心理療法のどのような側面が偽りの記憶を作り出すのかが明らかにされてきているのである（詳しくは、Lindsay & Read, 1994; Loftus, 1997b; 高橋, 1997を参照）。

## 6. 偽りの記憶研究の今後の方向性

これに対して、現在、心理療法家たちからも、記憶研究者が偽りの記憶の根拠として行っている記憶実験に対して、激しい反論が行われている (Freyd & Gleaves, 1996; Harvey & Herman, 1994; Kluft, 1997)。その中でも典型的な反論は、実験室内で検討されているような記憶と、性的虐待のようなトラウマ体験の記憶とでは、その種類が違うために、一般化できないというものである<sup>16)</sup>。

このように、現在なお、「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる論争

には、決着がついていない。その理由としては、さまざまなものが考えられるが<sup>17)</sup>、おそらく、もっとも大きな理由は、「記憶が抑圧を受けるのか、それとも、受けないのか」、「真実の記憶が回復されるのか、それとも、偽りの記憶が作り出されるのか」といったように、問題の立て方が二者択一的であったために、記憶研究者と心理療法家との間に接点が得られなかったことによると思われる。ここでは、記憶実験の知見を心理療法場面に一般化するためには、どのような研究が必要であるのかについて、以下の3つの点から、考えることにする。

### (1) どのようなトラウマが記憶の健忘を起こすのか？

一口にトラウマ体験と言っても、種類や程度によって、その影響が異なっ

- 
- 16) たとえば、欧米で広く読まれている Bass & Davis (1994) の通俗書『生きる勇氣と癒す力 (The courage to heal: A guide for women survivors of child sexual abuse)』の中では、記憶研究者の行っている研究を次のように批判している。すなわち、「ロフタスの実験室は家族の寝室に相当するか。自動車事故の写真と、目前に迫るベニスのイメージは同義か。空調の効いた快適な教室に座ることは、強姦されることと、果たして同義なのか。一口に記憶と言っても、種類によってその性質も違ってくるのではないだろうか。」(p. 418) というものである。
- 17) アメリカにおける「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる論争の背後には、実はフェミニズムに関する思想的対立が大きく関わっている。よく知られているように、Freud は、ヒステリーの原因として、いわゆる誘惑理論 (seduction theory) を主張し、性的なトラウマ体験を考えていた。しかし、後年、そのような体験は、クライアントの空想の産物に過ぎないと立場を変えている。このように女性クライアントの主張する性的虐待の体験を空想のものとして扱うことについては、フェミニズムの立場からは大きな批判を受けてきた (たとえば、Herman, 1992; 上野, 1996 も参照)。こうして、性的虐待を明らかにしたり、あるいはそれらの記憶を回復することが、フェミニズムを後ろ盾にした一つの社会的運動にまで発展していったのである。ところが、その後、これらの動きの反動として、いわゆるバックラッシュ運動が起こり、事態は、きわめて複雑な様相を示してきたのである (詳しくは、上野, 1996)。そして、このような状況の中で、回復された記憶が偽りの記憶であるという主張も、このバックラッシュ運動として位置づけられることがある。このように、「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる論争は、純粋な学問的論争を越えた思想的対立であるととらえることができる。

ている。たとえば、Elliott (1997) は、トラウマ体験を大きく3つの種類に分けている。すなわち、天災や自動車事故にあうことによる非対人関係トラウマ (noninterpersonal trauma)、自分の子どもを亡くしたり、暴力事件の目撃、愛する者の殺人や自殺などを目撃することによる目撃トラウマ (witnessed trauma)、レイプや肉体的、性的虐待などの対人関係トラウマ (interpersonal trauma)、の3種類である。また、同じトラウマの種類の中でも、当然のことながら、その重篤さの程度には違いがある。さらにまた、一回限りのトラウマと、性的虐待のような何度も行われるトラウマが分けて考えられることもある (Terr, 1991)。ところが、これまでの「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる論争では、このようなトラウマの種類や程度の違いが十分に考慮されずに、トラウマ体験が健忘されるかどうかだけが議論されてきた。

すでに、これまでも、一部の心理療法家の間では、トラウマの重篤さと健忘の程度が関連するということが示唆されてきた (Freyd, 1996)。このことに関して、人格の交代を伴うほどのきわめて重度の健忘を示す解離性同一性障害 (dissociative identity disorder) の原因のほとんどは、幼少時のきわめて重篤な性的虐待 (ないしは身体的虐待) にあることが明らかにされている<sup>18)</sup> (Boon & Draijer, 1993; Braun & Frischholt, 1992; Putnam, Guroff, Silberman, Barban, & Post, 1986)。つまり、トラウマの有無が健忘の有無と関連するのではなく、トラウマの重篤さが健忘の有無ないしは程度と関連することが示唆されているのである。

---

18) アメリカで解離性同一性障害の100事例 (女性92名、男性8名) を調べた Putnam et al. (1993) では97%の者が、また、オランダで71事例 (女性68名、男性3名) を調べた Boon & Draijer (1993) でも94.4%の者が、幼児期に性的虐待や身体的虐待を経験していることが明らかにされている。なお、一丸 (1993) は、日本と欧米における解離性障害の違いとして、日本では全生活史健忘などの心因性健忘が特徴であり、欧米では解離性同一性障害が特徴であると主張している。おそらく、このことが原因となって、日本においては、一般に解離性同一性障害はきわめて少なく、その事例報告も数えるほどしかないのかもしれない (服部, 1998; 一丸, 1990; 三田・岡本・酒井・江村・川上・生井・中島・切替, 1984; 斉藤・宮崎, 1978)。



したがって、今後、実験室で扱う出来事についても、それらが情動的でなければならないのは当然のことであるが（ただし、Roediger & McDermott, 1996も参照）、そのことに加えて、倫理的な限界はあるものの、扱う情動的出来事の種類の種類、程度、回数などを変数として組み込んだ実験の行われる必要があると思われる。

## （２）トラウマによってどのような種類の記憶が健忘を示すのか？

現在、記憶は、意識的想起が可能な顕在記憶（explicit memory）と、意識的想起をとまなわれない潜在記憶（implicit memory）の２つに分けられている（Richardson-Klavehn & Bjork, 1988; Roediger, 1990）。一般に、PTSDの記憶は、断片的で、感覚的、印象的、感情的と考えられ、これらは、意識的には想起できない潜在記憶として位置づけることができる（岡野, 1995）。たとえば、多くの場合、トラウマ体験は体のレベルで覚えられていると言われる。つまり、「その時受けた身体的な侵襲や苦痛が、それを受けた状況に対する記憶とは切り離されて、身体感覚としてののみ蘇る」（岡野, 1995, p. 17）というわけである。このような場合、顕在記憶としては想起できないわけだが、潜在記憶としては記憶に残っていることになる。

実際、このことは、ある白人男性のレイプ犠牲者のケースからも裏づけられる（Kaszniak et al., 1988）。病院に保護された時、彼は身体的に何ら問題はなかったが、そのトラウマ体験のために、逆向性の全生活史健忘（generalized amnesia）が認められた。ところが、レイプを受けたことを意識的には同定できなかったにもかかわらず、催眠の際に、レイプの断片的なイメージを産出していった。また、ロールシャッハ図版に対しては、性器の呼称反応（たとえば、「膣」など）が顕著に認められた。そして、TATテストを行った際、背後から攻撃する人物が描かれたカード（18BM）を見せられると激しく狼狽し、テスト後、自分のベルトで首吊り自殺を試みさえした。その後、催眠を使ったセッションが進む中で、２人の男に銃で脅されて肛門性交を行われたことを思い出し、これがきっかけとなって、す

すべての記憶を取り戻すことができたのである。

このケースから示唆されることは、これまで抑圧と呼ばれていた概念は、あくまでも顕在記憶の忘却であって、それらの記憶が潜在記憶として保持されることもあるのではないかという可能性である。もし、このことが正しいのならば、これまでのように、顕在記憶テストだけでは、トラウマ記憶の検討が十分ではないということになる。したがって、今後は、従来の顕在記憶テストだけではなく、潜在記憶テストもあわせて使って検討を進めていくことが必要であると思われる (Smith, Gilliland, Gerkens, Pierce, & Tindell, 1998)。

### (3) 記憶の真実性を知っていることで偽りの記憶が作り出されてしまう可能性はないのか？

記憶の実験場面と心理療法場面のもっとも大きな違いは、被験者ないしはクライアントが想起する(語る)記憶の真実性の判断に関した点にある。すなわち、実験者は実験における客観的な事実(記憶の真実性)を知っているのに対して、心理療法家は少なくとも心理療法中には客観的な事実を知らない。このように心理療法場面において、心理療法家がクライアントの想起する記憶の真実性を判断することはきわめて難しい。記憶研究者は、この点を取り上げて、心理療法場面において偽りの記憶が作られやすいと主張している。しかし、逆に、このような危険性を心理療法家が認識し、慎重に行動する限り(河合, 1992)、記憶研究者の主張するほどは、偽りの記憶が作り出されにくいという面もあるのかもしれない。

一方、記憶実験の実験者が被験者の想起する記憶の真実性について、あらかじめ知っていることにより、偽りの記憶を作り出さしてしまう可能性も考えられなくもない。すなわち、本論文で述べた偽りの記憶の移植実験において、被験者は実験者が自分の記憶の真実性について(母親から聞いて)詳しく知っていると思っている。そのために、見方を変えるのならば、実験者による教示(起こっていない出来事であるにもかかわらず、実際に起こった

出来事であると思ひこませること)によって、無理矢理、被験者に偽りの記憶を生み出させている面もないとは言えない。

このことに関して、いわゆる事後情報効果 (post-event information effect) も、客観的な事実を知っている実験者の誘導尋問に影響されるのであって、実験者 (尋問者) が何も知らない場合には、事後情報による記憶の歪みの認められないことのあることが知られている。たとえば、強盗殺人事件の目撃者は、その現場にいなかった者 (つまり客観的な事実を何も知らない者) による誘導尋問には、まったく影響を受けない (Yuille & Cutshall, 1986)。また、事後情報効果が起こるのは、実験者がその事件を知っていると被験者が思った時だけであることも明らかにされている (Smith & Ellsworth, 1987)。

したがって、実験室内で行われる偽りの記憶の実験では、実験者が客観的な事実を知っている特殊な状況だからこそ、偽りの記憶が生み出されてしまうという可能性も完全には否定できない。これに対して、心理療法場面では、セラピストの方がクライアントの想起する記憶の真実性については何も知らないために、クライアントを中心に、協同で記憶を想起する状況になっている。このような状況は、協同想起 (collaborative remembering) と呼ばれ、ごく最近になって、実験的な検討がはじめられたばかりである。しかも、協同想起の場面では、これまでの記憶実験からは予測できないような現象も多く認められている (森, 1995; 高橋, 1999)。

今後、偽りの記憶の移植実験においても、心理療法場面と同様な協同想起事態を変数として取り入れて、偽りの記憶の移植に対する影響を明らかにしていくことが必要であると思われる (高橋, 1997; Takahashi, 1999)。そうすることによって、実験室で得られた知見を心理療法場面に一般化することが可能となり、「回復された記憶・偽りの記憶」をめぐる論争の解決の糸口を見つけ出すことができるはずである。

## 付記

本論文は、1998年10月10日の日本心理学会第62回大会（東京学芸大学）のシンポジウム（偽りの記憶をつくる）において話題提供をした内容をもとに加筆修正したものである。貴重な話題提供の機会を与えていただいた筑波大学 太田信夫先生、愛知教育大学 多鹿秀継先生に心より感謝したい。また、太田信夫先生には、指定討論者として、きわめて有益なコメントをいただいた。さらにまた、シンポジウムにおいて、話題提供者であった大阪府立大学 桐村雅彦先生、日本大学 巖島行雄先生の話題提供の内容からは、本論文を作成するにあたり、貴重な示唆を得ることができた。心より感謝したい。

## 引用文献

- American Psychiatric Association 1994 *Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV*. Washington D. C.: American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳 1995 DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院)
- 飛鳥井望 1998 外傷理論をめぐる最近の論争 「蘇った記憶」と「偽りの記憶」について 精神療法, 24, 324-331.
- Bass, E., & Davis, L. 1994 *The courage to heal: A guide for women survivors of child sexual abuse*. New York: HarperCollins. (エレン・バス/ローラ・デイビス著 原美奈子・二見れい子訳 1997 生きる勇気と癒す力ー性暴力の時代を生きる女性のためのガイドブック 三一書房)
- Boon, S., & Draijer, N. 1993 Multiple personality disorder in the Netherlands: A clinical investigation of 71 patients. *American Journal of Psychiatry*, 150, 489-494.
- Briere, J. 1992 Methodological issues in the study of sexual abuse effects. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 60, 196-203.
- Briere, J., & Conte, J. 1993 Self-reported amnesia for abuse in adults molested as children. *Journal of Traumatic Stress*, 6, 21-31.
- Braun, B. G., & Frischholz, E. J. 1992 Remembering and forgetting in patients suffering from multiple personality disorder. In S.-A. Christianson (Ed.), *The handbook of emotion and memory: Research and theory*. Hillsdale: N.J., Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 411-427.
- Burgess, A. W., & Holmstrom, L. L. 1974 Rape trauma syndrome. *American Journal of Psychiatry*, 131, 981-986.
- 地下鉄サリン事件被害者の会 1998 それでも生きていく サンマーク出版
- Christianson, S.-A., & Nilsson, L.-G. 1989 Hysterical amnesia: A case of aversively motivated isolation of memory. In T. Archer & L.-G. Nilsson (Eds.), *Aversion, avoidance, and anxiety: Perspectives on aversively motivated behavior*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 289-310.
- Elliott, D. M. 1997 Traumatic events: Prevalence and delayed recall in the general population. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 65, 811-820.
- Feldman-Summers, S., & Pope, K. S. 1994 The experience of "forgetting" child-

- hood abuse: A national survey of psychologists. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 62, 636-639.
- Freud, S. 1915 *Verdrängung*. In Sigmund Freud Gesammelte Werke Bd. XIV. Frankfurt am Mein: S. Fischer Verlag GmbH. (井村恒郎・小此木啓吾他訳 1970 フロイト著作集第6巻 自我論・不安本能論 人文書院 Pp. 78-86.)
- Freyd, J. J. 1996 *Betrayal trauma: The logic of forgetting childhood abuse*. Cambridge: Harvard University Press.
- Freyd, J. J., & Gleaves, D. H. 1996 "Remembering" words not presented in lists: Relevance to the current recovered/false memory controversy. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition*, 22, 811-813.
- 藤森和美 1997 災害被災者の悲嘆過程と回復への援助 松井豊編 悲嘆の心理サイエンス社 Pp. 185-202.
- 福井敏 1992 性的虐待, 特に近親相姦を生育史に持つ患者の治療について 精神分析研究, 36, 119-126.
- Gudjonsson, G. H. 1997 Accusations by adults of childhood sexual abuse: A survey of the members of the British False Memory Society (BFMS). *Applied Cognitive Psychology*, 11, 3-18.
- Harvey, M. R., & Herman, J. L. 1994 Amnesia, partial amnesia, and delayed recall among adult survivors of childhood trauma. *Consciousness and Cognition*, 3, 295-304.
- 服部雄一 1998 多重人格者の真実 講談社
- Herman, J. L. 1992 *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. (ジュディス・L・ハーマン著 中井久夫訳 1996 心的外傷と回復 みすず書房)
- Herman, J. L., & Schatzow, E. 1987 Recovery and verification of memories of childhood sexual trauma. *Psychoanalytic Psychology*, 4, 1-14. (J・L・ハーマン/E・シャッツウ著 穂積由利子訳 1997 児童期性的トラウマに関する記憶の回復と検証 斎藤学編 現代のエスプリ ト라우マとアダルト・チルドレン 至文堂 Pp. 83-98.)
- Hiransi, A. 1998 The creation of false memories and their emotional qualities. 平成9年度聖心女子大学卒業論文
- 広岡智子 1998 子どもの虐待・性的虐待—現場からの報告— 思春期青年期精神医学, 8, 3-9.
- 久留一郎 1996 PTSD: 心的外傷後ストレス障害 佐々木正人・湯川隆子(編) 児童心理学の進歩—1996年版— 金子書房 Pp. 27-56.
- Horn, M. 1993 Memories lost and found. *U. S. News & World Report*, November, 29, pp. 52-63.
- Hyman, I. E. Jr., & Billings, F. J. 1995 Individual differences and the creation of false childhood memories. *Memory*, 6, 1-20.
- Hyman, I. E. Jr., & Pentland, J. 1996 The role of mental imagery in the creation of false childhood memories. *Journal of Memory and Language*, 35, 101-117.
- Hyman, I. E. Jr., Husband, T. H., & Billings, F. J. 1995 False memories of child-

- hood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, 9, 181-197.
- 一九藤太郎 1990 多重人格の一例—その成り立ちと変遷について— 心理臨床学研究, 8, 32-44.
- 一九藤太郎 1993 多重人格研究をめぐる最近の動向 精神分析研究, 37, 52-60.
- 池田由子 1987 児童虐待—ゆがんだ親子関係 中央公論社
- 池田由子 1991 汝わが子を犯すなかれ—日本の近親姦と性的虐待— 弘文堂
- 池田由子 1993 子どもの虐待 無藤隆・山田洋子編 児童心理学の進歩—1993年版— 金子書房 Pp. 243-268.
- 石川義之 1992a インセストと性的虐待—アメリカおよびわが国の実状— 島根大学法文学部文学紀要, 17-I, 55-81.
- 石川義之 1992b インセスト的虐待の実相—現代アメリカに関する一断面— 島根大学法文学部文学紀要, 18-I, 67-104.
- 石川義之 1996 インセスト的虐待のトラウマ(I) 島根大学法文学部紀要(社会システム学科編), 1, 53-80.
- 石川義之 1997 大学生・専門学校生等調査にみる児童虐待の実態—性的虐待を中心として— 島根大学法文学部地域社会教室論集, 6, 99-138.
- 石川義之 1998 インセスト的虐待のトラウマ(II) 島根大学法文学部紀要(社会システム学科編), 2, 1-40.
- Kail, R. 1990 *The development of memory in children*. 3rd. ed. New York: Freeman. (R.ケイル著 高橋雅延・清水寛之訳 1993 子どもの記憶—おぼえること・わすれること— サイエンス社)
- Kalichman, S. C., & Gary, A. T. (Eds.) 1996 *Child abuse: Abstracts of the psychological and behavioral literature, 1990-1995*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Kasznik, A. W., Nussbaum, P. D., Berren, M. R., & Santiago, J. 1988 Amnesia as a consequence of male rape: A case report. *Journal of Abnormal Psychology*, 97, 100-104.
- 河合隼雄 1992 心理療法序説 岩波書店
- Kihlstrom, J. F. 1996 The trauma-memory argument and recovered memory therapy. In Pezdek, K., & Banks, W. P. (Eds.) *The recovered memory/false memory debate*. San Diego: Academic Press. Pp. 297-311.
- 北山秋雄編 荒堀憲二・石山一舟・須藤八千代・内藤和美・北山秋雄著 1994 子どもの性的虐待—その理解と対応をもとめて 大修館書店
- Kluft, R. P. 1997 The argument for the reality of delayed recall of trauma. In Appelbaum, P.S., Uyehara, L. A., & Elin, M. R. (Eds.), *Trauma and Memory: Clinical and legal controversies*. New York: Oxford University Press. Pp. 25-57.
- 子ども性虐待防止市民ネットワーク・大阪編 1997 子ども性虐待防止白書 松香堂書店
- Lindsay, D. S., & Read, J. D. 1994 Psychotherapy and memories of childhood sexual abuse: A cognitive perspective. *Applied Cognitive Psychology*, 8, 281-338.

- Loftus, E. F. 1993 The reality of repressed memories. *American Psychologist*, 48, 518-537.
- Loftus, E. F. 1997a Repressed memory accusations: Devastated families and devastated patients. *Applied Cognitive Psychology*, 11, 25-30.
- Loftus, E. F. 1997b Creating childhood memories. *Applied Cognitive Psychology*, 11, S 75-S 86.
- Loftus, E. F. 1997c Creating false memories. *Scientific American*, September, 50-55. (エリザベス・E・ロフタス著 仲真紀子訳 1997 偽りの記憶を作る 日経サイエンス 12月号, 18-25.)
- Loftus, E. F., & Ketcham, K. 1994 *The myth of repressed memory*. New York: St. Martin's Griffin. (エリザベス・E・ロフタス&キャサリン・ケッチャム著 仲真紀子訳 印刷中 抑圧された記憶の神話 誠信書房)
- Loftus, E. F., Garry, M., & Feldman, J. 1994 Forgetting sexual trauma: What does it mean when 38 % forget? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 62, 1177-1181.
- 緑河実紗 1998 心を殺された私—レイプ・トラウマを克服して 河出書房新社
- 三田俊夫・岡本康太郎・酒井明夫・江村州・川上正輝・生井和之・中島国博・切替辰哉 1992 分裂症にみられた多重人格の2症例 精神医学, 26, 825-831.
- 森直久 1995 共同想起事態における想起の機能と集団の性格 心理学評論, 38, 107-136.
- 森岡正芳 1994 緊張と物語—聴覚的統合による出来事の変形— 心理学評論, 37, 494-521.
- Nevin, J. 1997 *Past recall*. London: Harper Collins. (ジャック・ネヴィン著 岡聖子訳 1998 記憶の闇の底から 扶桑社)
- 生地新 1992 性的外傷体験の取り扱いをめぐる 精神分析研究, 36, 138-145.
- 岡野憲一郎 1995 外傷性精神障害—心の傷の病理と治療 岩崎学術出版社
- Pope, H. G., & Hudson, J. I. 1995 Can memories of childhood sexual abuse be repressed? *Psychological Medicine*, 25, 121-126.
- Pope, K. S., & Brown, L. S. 1996 *Recovered memories of abuse: Assessment, therapy, forensics*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Putnam, F. W., Guroff, J. J., Silberman, E. K., Barban, L., & Post, R. M. 1986 The clinical phenomenology of multiple personality disorder: Review of 100 recent cases. *Journal of Clinical Psychiatry*, 47, 285-293.
- Richardson-Klavehn & Bjork, R. A. 1988 Measures of memory. *Annual Review of Psychology*, 39, 475-543.
- Roediger, H. L. III 1990 Implicit memory: Retention without remembering. *American Psychologist*, 45, 1043-1056.
- Roediger, H. L. III & McDermott, K. B. 1996 False perceptions of false memories. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition*, 22, 814-816.
- Russel, D. E. H. 1986 *The secret trauma: Incest in the lives of girls and women*. New York: Basic Books.

- 斉藤正武・宮崎忠夫 1978 多重人格の1症例 精神医学, 20, 257-263.
- 斎藤学 1998a NHK 人間大学 家族の間をさぐる—現代の親子関係 日本放送出版協会
- 斎藤学 1998b 家族と暴力について 日本弁護士連合会 子どもの権利委員会・両性の平等に関する委員会(編) 家族・暴力・虐待の構図 読売新聞社 pp. 11-32.
- Shapiro, L. 1993 Rush to judgment. *Newsweek*, April, 19, pp. 44-50.
- Sheler, J. L. 1993 Trials that test faith. *U.S. News & World Report*, November, 29, p. 64.
- Smith, S. M., Gilliland, T. R., Gerkens, D. P., Pierce, B. H., & Tindell, D. R. 1998 *Dissociations of false memory measures: Cued recall versus stem completion*. Paper presented at the 39th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Dallas, Texas, Nov. 19-22.
- Smith, V. L., & Ellsworth, P. C. 1987 The social psychology of eyewitness accuracy: Misleading questions and Communicator expertise. *Journal of Applied Psychology*, 72, 294-300.
- 高橋雅延 1997 偽りの性的虐待の記憶をめぐる 聖心女子大学論叢 89, 91-114.
- 高橋雅延 1999 記憶の社会的側面—協同想起をめぐる— 梅本堯夫監修・川口潤編 現代の認知科学(仮題) 培風館
- Takahashi, M. 1999 *Does collaborative remembering reduce false memory?* Paper presented at the 3rd Society for Applied Research in Memory and Cognition, Boulder, Colorado, July 9-11.
- 田辺肇・小川俊樹 1992 質問紙による解離性体験の測定—大学生を対象にしたDES (Dissociative Experience Scale) の検討— 筑波大学心理学研究, 14, 171-178.
- Terr, L. C. 1991 Childhood traumas: An outline and overview. *American Journal of Psychiatry*, 148, 10-20.
- Terr, L. C. 1994 *Unchained memories: True stories of traumatic memories, lost and found*. New York: Basic Books. (レノア・テア著 吉田利子訳 1995 記憶を消す子供たち 草思社)
- 上野加代子 1996 児童虐待の社会学 世界思想社
- Williams, L. M. 1994 Recall of childhood trauma: A prospective study of women's memories of child sexual abuse. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 62, 1167-1176.
- Woodward, K. L. 1994 Was it real or memories? *Newsweek*, March, 14, pp. 58-59.
- 山口遼子 1994 セクシャルアビューズ サンドケー出版局
- Yuille, J. C., & Cutshall, J. L. 1986 A case study of eyewitness memory of a crime. *Journal of Applied Psychology*, 71, 291-301.